



## つなぐちゃんベクトル

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会社内誌 臨時増刊 249号 2011.1.31 発行 社会政策研究所

=====

宮城県の遷延性意識障害の調査、そして、発達障害に関係する事件と支援を考える読売新聞の3回の連載などをお届けします。【kobi】

### 視覚障害者：金融機関で代筆断られるケースが続発

毎日新聞 2011年1月29日

視覚障害者が、金融機関で口座開設や預金引き出しを行う際、手続き書類の代筆を職員に断られるケースが後を絶たない。日本盲人会連合（東京都）の調査によると、昨年9～12月だけで全国で37件あった。代筆行為は法規定がなく、金融機関が内規を定めるなどして対応しているのが現状。このため現場職員に十分に浸透していないのが原因とみられる。こうした事態を受け、金融庁は、金融機関が代筆の態勢を整えるよう監督指針を改正することを決めた。

金融機関で口座を開設する場合、本人や印影の確認が必要なため原則として窓口での対応が求められる。視覚障害者に対しては、各金融機関が職員による代筆を認めるなどして対応しているが、実際の窓口対応では、代筆を断られたり、家族に書いてもらうよう求められるケースが相次いでいるという。同連合によると、昨年9～12月の間に報告があったのは、東京10件 神奈川7件 長崎3件 大阪、群馬、鹿児島各2件 - - など計37件。金融機関別では、銀行26件 信用金庫9件 その他2件だった。

問題事例の背景には、代筆規定が十分でなかったり設備の不備などがあるという。金融庁によると、職員による代筆規定を内規などで明文化している金融機関は全体の65.9%（昨年9月末現在）。また、音声案内で操作が可能な現金自動受払機（ATM）の設置は同57%にとどまっている。こうした状況が現場での不適切な対応にもつながっていると、自見庄三郎金融・郵政担当相は、代筆や点字・音声案内付きATM設置を全金融機関に求める方針を表明している。

全国銀行協会（全銀協）広報室は「障害者の要望などに銀行が応えられるよう、全銀協としても支援していきたい」と話す。一方、日本盲人会連合団体事務局の有泉一如課長代行は「金融機関は公共サービスであり、視覚障害者の思いに添えてほしい」と話している。

【堀江拓哉】

#### 「代筆、窓口まで周知徹底を」

大阪市視覚障害者福祉協会副会長で全盲の山野一美さん（58）＝同市生野区＝も「代筆」を巡り、金融機関の窓口で何度も押し問答をした経験がある。職員が代筆を了承しても、「名前だけは自分で」と言われることが多いと言う。

昨年夏には、代筆規定のある金融機関の外交員に勧められ口座を開設。孫のために年金から積み立てる手続きができるか確認したところ、家族に書類を書いてもらうように言われたという。後日、金融機関側が職員2人で代筆をすることを約束したが、山野さんは「金融機関では、何か問題が起きた時のことを心配して『なるべくなら代筆をしたくない』』というような雰囲気を感じる。私たちは身分証も出しており、自分のお金を自分で出し入れしたいだけ。代筆のことをきちんと窓口まで周知徹底してほしい」と願う。

## 予想以上 驚きと戸惑い 遷延性意識障害 宮城 968人

河北新報社 2011年1月31日

「こんなにいるとは...」。河北新報社と広南病院が実施した宮城県内の遷延（せんえん）性意識障害の実数調査で現れた「約1000人」という数に、関係者は驚きと戸惑いの声を上げた。「植物状態」とも呼ばれ、医療、介護制度のはざまに埋もれて、これまで掘り起こされることのなかった人々。その存在は、最重度の障害のある人を支えていく社会の在り方を、私たちに問い掛けている。

1973年から全国に先駆けて「遷延性意識障害者治療研究事業」を実施している宮城県。事業の対象者数が実数の目安になってきたが、調査結果は大幅に上回った。

佐々木清司保健福祉部次長は「事業の対象外として、介護保険や他の重度障害支援策で手当てされている人もいると思う。968人という数が多いか少ないかは、なかなか言いづらい」と話す。

事業は「宮城方式」として全国で知られる。佐々木次長は「財政事情は厳しいが、患者や家族らさまざまな人の思いを受けて地道に続けている」と述べ、今後も事業を継続する方針を示す。一方で「遷延性意識障害の人たちは全国に存在する。本来は社会保障の枠組みの中で一律に行うのが筋だ」と国の取り組みを求めた。

遷延性意識障害の患者家族でつくる「宮城県ゆずり葉の会」の沼田孝市会長は「予想を超える数字だ。未回収の医療機関や施設の分を加えると、さらに多いのだろう」と話し、「大変困難な家族介護によって多くが支えられているのではないか」と強調する。

9割近くが病院や施設で生活しているとの結果については「国が進める介護型療養病床の削減方針に警笛を鳴らさなければいけない。医療的ケアの必要性が高い人の受け入れに早く手を打たないと今後、団塊の世代の介護体制に大きな支障が出る」と指摘した。

重度障害者の自立ホームなどを運営する仙台市の社会福祉法人「ありのまま舎」理事長の大坂純仙台白百合女子大教授（社会福祉学）は「遷延性意識障害は生活支援が主課題。生活できる場として障害者施設を充実させなければならない」と、受け入れ先の拡充を訴える。

大坂教授は「患者本人の意思表示が難しい上、家族も介護に追われて声を上げづらい。行政は待ちの姿勢でなく、困っている人たちのニーズがどこにあるのか、現場に足を運んで確かめてほしい」と要望した。

## 息子の障害悩んだ末に 殺人容疑の母、支援団体にも相談

朝日新聞 2011年1月30日

東京都立川市で今月、4歳の長男を殺したとして殺人容疑で逮捕された母親。以前から長男の発達障害に悩んでいたことが警視庁立川署の調べで分かった。相談を受けていた友人らは「子どもがかわいそう」「周囲の見えない壁があったのかも」と悔やむ。

逮捕されたのは鈴木紀子容疑者（35）。今月12日午後1時ごろ、自宅でひも状の布を使い、長男の隆正君の首を絞めて殺害した疑いが持たれている。翌朝、会社員の夫（36）から110番通報があった。容疑者の精神的動揺は大きく、東京地検立川支部は28日、鑑定留置を決めた。4月中旬までの間、責任能力の有無を調べる方針だ。

「あの人だ」

発達につまずきがある子やその母親を支援する「かたつむりの会」（東京都八王子市）の代表、西村南海子さん（41）は事件を知り、1年半前のできごとを思い出した。

立川市で開かれた学習会の自己紹介の場で、順番が来る前に泣き出し、椅子から崩れ落ちそうになった女性がいた。それが鈴木容疑者だった。慌てて廊下に連れ出し、ぼつぼつ語り始めた言葉に耳を傾けた。「子供の障害を受け入れられない」「つらいと思う自分が嫌だ。パパが話を聞いてくれるからいいけど」。そして、自ら言い聞かせるように繰り返していた。

「明るい、前向きなお母さんになりたい」

立川市によると、隆正君は1歳半検診で発達障害と診断された。鈴木容疑者はトイレトレーニングがうまくいかない、集団生活に不安がある、と市に相談していた。

鈴木容疑者は夫と長女(6)、隆正君の4人暮らしだった。犯行当日の午前、いつもの時間に登園しないため、保育園が電話したところ、長女が風邪なので隆正君も休ませると答えたという。逮捕後の調べに、「数日前から、この子は1人になったら生活できないと思うようになった」と供述しているという。

隆正君は保育園で、部屋から飛び出すなど落ち着きのない時もあった。それでも、お菓子を友達にあげたり、以前よりも話せる言葉が増えたりしていた。

保育園の保護者や支援グループのメンバーは、鈴木容疑者が保育士らの話に、うなずきながら聴き入る姿が記憶に残っている。周囲に積極的に交じるタイプではなく、最近の様子に大きな変化は見られなかった。ただ、保育園と交わす連絡帳の記述量は減っていたという。

「かたつむりの会」の西村さんは、会員向けのメールで「支えられなかった」と自責の念を記した。30通以上のメールが会員の間を駆けめぐった。「紙一重の自分の姿です」「私も世界でひとりぼっち」「もっと強くなりたい。そしていつも子供の味方でいたい」「母親がどんなにつらかったか。そして信頼していた母親に。涙が止まらない」

鈴木容疑者の夫は取材に対し、「まだ混乱している。頑張るしかない」と言葉少なに話した。(舟橋宏太、根岸拓朗)

**発達障害** 先天的な脳の機能障害とされる。他人の感情を読み取りにくかったり言葉の発達が遅れたりするコミュニケーションの障害 読み書き計算などの学習の障害 じっと待つことが苦手で、注意力が散漫 など様々な症状がある。状況に応じた適切な行動を増やす行動療法、ロールプレー、投薬などの治療で症状は緩和できる。文部科学省の2002年の調査では、小中学校の通常学級に発達障害とみられる子どもが6.3%いた。05年4月施行の発達障害者支援法では、発達障害の早期発見と支援を国と自治体の責務と位置づけた。

## 見えない障害(上) 共生へ 適応に協力の輪

読売新聞 2011年1月27日



バザーの反省点や、今後の運営について話し合う「アスペの会」の集会

他人の感情や、言葉の裏の意味を読み取るのが苦手。自分のことばかり話し続け、会話が成立しない。一つの考えに固執し、他人とぶつかる――。こうした悩みを訴える人が増えている。

精神科では「アスペルガー症候群」という聞き慣れない病名を告げられることがある。言語力や会話力は高いが、対人関係がうまくいかない発達障害の一つで、うつや不眠症に陥るなどの二次障害も深刻だ。

県内には早くから患者と家族の自助グループがある。最近では、金沢大を中心に治療と共生を両立させる取り組みも始まり、金沢を発達障害者対策のモデル地区にしようとの機運が高まっている。

「人と目を合わせるのも、会話をするのも苦痛ですが、会社では必要と割り切り、何とか耐えています」。昨年11月、金沢大で開かれた発達障害者との共生を考える勉強会。集まった患者の家族を前に、県内に住む男性会社員(36)は伏し目がちに体験を語り出した。

子どもの頃から集団行動が苦手で、同級生と何をしゃべっていいかわからなかった。何

気なく口にした一言でよく相手を怒らせた。大学では他人と話すのが怖くなり、教室にも入れなくなって中退した。

アルバイトから正社員に登用された今の会社でも、同僚の雑談の輪に入れず、取引先との交渉で失言し、上司から注意されることもある。それでも「おっちょこちょいなんです」と笑ってごまかせるようになり、勤続5年目で管理職に昇進した。今は対人関係の苦手意識を克服しようと、同じ悩みを抱える人の集まりに出て体験談を話せるまでになった。「こんなにうまくいっているケースは珍しい」。患者の家族からは羨望の声も上がった。

アスペルガーは「見えない障害」だ。見た目では判別しにくい。患者も周囲に隠そうとする。病院に行っても、健常と障害のグレーゾーンに位置し、病名が見つからないことも多い。

このため、行政の対策は大幅に遅れた。国内で研究や診療が本格化したのは2000年頃で、早期発見と、教育や就労の支援を自治体に求めた発達障害者支援法が施行されたのは05年だ。

行政の支援の遅れを見かね、県内では、02年に金沢大でコミュニケーション障害学を専門とする大井学教授(58)が中心となって、患者や家族を支援するNPO法人「アスペの会」を設立。患者を居酒屋に誘って人付き合いを学ばせたり、バザーを開いて接客の経験を積ませたりし、社会適応を促している。

会員で加賀市の男性(32)は10年前、就職の失敗をきっかけに精神科を受診し、アスペルガーと診断された。当初は「普通だと思っていたのに」と動揺したが、会に参加し、「自分だけじゃなかった」と気が楽になったという。

進学や就職の失敗を機に初めて障害と気付くケースは多いが、大人になってから投薬やカウンセリング治療を受けようにも、すでにうつなどを発症し、社会適応が難しいこともある。

そこで大井教授らの研究グループは、09年から市内の幼稚園や小学校で保護者向けの啓発活動を開始。早期発見、早期治療に向けた環境作りを進めている。10年には、一般市民との意見交換会も開き、協力の輪をさらに広めようとしている。

大井教授は「地域の絆(きずな)が残る金沢なら、患者が社会適応に励み、地域も患者の行動をある程度許容する共生の実現が可能だ」と話す。

**発達障害** 知的発達の遅れを伴わない脳機能障害。アスペルガー症候群や自閉症、注意欠陥・多動性障害、学習障害などが含まれる。文部科学省の2002年の教員への調査では、通常学級に、その可能性のある児童が6・3%いた。

## 見えない障害(中) 天職探し大きな関門

読売新聞 2011年1月28日



### 発達障害者の相談にも乗るハローワークの窓口

学歴は高くスーツの着こなしもすきがない。履歴書には毛筆8段、ペン習字9段とある。金沢市内の企業で、営業職の面接に訪れた男性は、できる男の雰囲気漂わせていた。同社の会長(59)は「ぜひ採用したい」と身を乗り出した。

しかし、ペン習字の達人の履歴書は、なぜかパソコンで作られていた。訳を尋ねると、「ペン習字にこの紙の質感は合わないんです」と真面目な顔で答えた。会長は「アスペルガーだ」と直感した。物事に極度のこだわりを持つ人に、臨機応変さが求められる営業職は向かないと、会長は採用を見送った。

アスペルガー症候群などの発達障害者にとって、就職は大きな関門だ。面接官と目を合わせられず、ちぐはぐな受け答えをして落とされることが多い。何度も不採用となるうち、拒絶されるのを恐れて引きこもったり、入社できても長続きしなかったりする。ハローワ

ークの関係者は「職探しの常連には、発達障害が疑われる人も少なくない」と明かす。

金沢市の企業は数年前まで、一流大を卒業し、一読しただけで分厚い専門書を理解できる優秀な研究員と契約していた。会社は、ある技術を採用しようとしていたが、別の技術に強いこだわりを持っていた彼は、自分の案を押し通そうとして、同僚と衝突してしまった。

社内カウンセラーの分析はアスペルガー症候群。同社幹部は「優秀だったが、全体のチームワークを考えると、業務に支障が出るため、契約更新を断念せざるを得なかった」と語る。

就職は発達障害者の自立の決め手となるだけに、家族や当事者の思いは切実だ。それは、ペン習字の達人を不採用にした会長も痛いほどわかっている。会長の高校2年生の長男もアスペルガーだからだ。

長男の記憶力は抜群だ。幼稚園の頃は200ページ以上のことわざ集を読み、ページ数まで丸暗記してしまった。高校でも暗記科目を中心に上位の成績を維持している。だが、一つのことに集中すると、他に意識が及ばないようで、財布や宿題をよく忘れる。

文化系のクラブでは、友達と共通の話題で盛り上がっている。気遣いや場の空気を読むことは苦手で、自分のことばかり話す癖があるが、周囲は、ちょっと変わった「個性」として受け止めてくれている。だが、長男は「無理に友達を作ろうとは思わない」と言って、休みに一緒に遊びに行くこともない。

会長は長男の将来を心配し、夫婦で発達障害の勉強会に参加している。長男を小学生の頃から自助グループに連れて行き、心地よく過ごせる居場所を増やそうと心がけてきた。人との関わりあいの仕方を学ぶことで、同級生とも接しやすくなっているようだ。

それでも、就職となると不安は尽きない。自ら経営する会社は、営業が中心、長男には最も向いていない職種だから、「うちには入社させないよ」と告げている。長男も自分の適性がわかってきたのか、「翻訳家や芸員になりたい」と口にするようになった。

「人と接することが少ない職人的な業種なら能力を発揮できるかもしれない。そんな仕事に出会えるといいのだが……」と会長は祈るように話した。

## 見えない障害（下）長所伸ばせる支援を

読売新聞 2011年1月30日



### おもちゃの電話を使いながら、ビジネストークの練習をする女性

「A社のBと申します。コピー用紙を注文したいんですけど……」。昨年12月、県立金沢産業技術専門校（金沢市）で、男女6人がペアを組み、おもちゃの電話で取引先とのビジネストークを練習していた。6人は、10～30歳代のアスペルガー症候群や自閉症などの発達障害者たち。模範例を読む声はうわずり、顔には緊張の色が浮かんでいる。

「『いつも大変お世話になっております』などのクッション言葉を使ったほうがいいですね」。女性教員がやさしく指導すると、受講者の女性（32）は「そうかぁ、その一言が取引の円滑化につながるんだ」と表情を和らげた。

このクラスは、発達障害者向けに9か月間の就業訓練を行う「ワークサポート科」。国の基本計画で、公的な職業訓練施設で軽度の障害者の受け入れを進める方針が盛り込まれたことを受け、昨年度、新設された。訓練後のアフターケアも手厚く、県や県教委、ハローワークが連携して就職を後押ししている。

行政一丸の働きかけに、企業も門戸を開きつつある。ワークサポート科の1期生6人のうち5人は食品関係や医療福祉系の企業に就職した。

就職先の一つ、白山市の機械メーカー「中村留精密工業」では、アスペルガーの男性（20）が、上司の指示を受け、図面をコピーしたり、コンピューターに取り込んだりする単

純作業を行っている。

同社では発達障害者の雇用は初めてだったが、「一つのこと強いこだわりを見せる」「急な作業変更や、二つ以上の指示があると混乱する」といった障害の特性に配慮し、同じ手順を繰り返す仕事を任せた。同社の浦久直総務部長は「真面目に取り組んでくれている。こういう人なら、あと数人は欲しい」と評価する。

だが、この男性の身分は、不安定なパート職員。ワークサポート科の卒業生は全員、障害者枠での採用だ。障害者雇用促進法では、企業に一定数の障害者の雇用を義務づけており、企業がこうした枠を満たすために雇用された面も大きい。

発達障害者やその傾向がある人でも、就職して幹部に昇進した例もある。特有のこだわりの強さや、好きなことにのめり込む集中力の高さを生かし、芸術家や研究者、医師、教師、弁護士として活躍する人もいる。

ベストセラー小説で映画化もされた「いま、会いにゆきます」の作者、市川拓司さん(48)は、会社員として10年以上勤めた後、作家に転身した経歴を持つ。

市川さんが初めて勤務したのは出版社だった。人間関係に苦しみ、3か月で退職した。転職先の税理事務所では、顧客への電話確認を怠ったり、約束をすっぽかしたりとミスを連発。それでも付せんを机に張って忘れ物を減らすなどし、14年間我慢して働き続けた。

その後、空想癖を生かして、文筆業で身を立てるようになったが、才能を伸ばすことができたのは「母の支援が大きかった」と振り返る。

小さい頃から、落ち着きがなく、周囲の和を乱して大人から怒られることが多かったが、その度に母親が盾となり、「思い切って好きなようにやりなさい」と助言してくれたからだ。

市川さんは、こう話す。「幼少期には親や教師の理解や支援が必要だ。発達障害者が自らを卑下せず、長所を伸ばせる環境を整えた上で、自分でも社会性を身に着ける努力をすれば、共生に向かって大きく近づけるのではないか」(この連載は、石坂麻子が担当しました)

## 「障害者の権利条例」制定へ さいたま市、政令市で初めて

東京新聞 2011年1月30日

さいたま市は二月の定例会市議会に「障害者の権利の擁護等に関する条例(ノーマライゼーション条例)」案を提出する。成立すれば北海道と千葉県に次いで三例目で、政令市では初めて。関連の予算計九億七千万円を当初予算案に計上する。(前田朋子)

条例案は、障害がある人の地域での共生を目指し、差別や虐待を禁止。自立や社会参加への支援を市が行うことを定めた。差別や虐待の訴えがあり、当事者間で調整がつかない場合は、障害者や市民なども入った「権利擁護委員会」をつくり、あっせんや勧告をする。

保証人不在などで、今までは難しかった障害者の民間住宅への入居を支援するなど、賃貸契約の相談に二十四時間応じるサポート事業を条例制定と同時に試行。新年度予算に約七百二十七万円を盛り込んだ。また、今まで利用範囲を余暇活動での外出時に制限していた「移動支援事業」の対象範囲を通学・通所を含めるよう拡大。介助者の人件費などとして、九億一千九百万円を増額する。

条例制定は、清水勇人市長が選挙公約に掲げていた。当選後の二〇〇九年十一月から、障害者施策推進協議会が話し合いを重ね、昨年十二月に条例制定を求める答申を出していた。

たまには太陽の子・手をつなぐ、たまにはつなぐちゃんベクトル、たまにブログたまにはチェック



大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行